

学びの質の高まりをめざして

1. ヴィジョン

本校の教育目標は、「豊かな情操と知性を身につけ、明るく、美しく、創造性に富む児童を育成する。」である。

21世紀の知識基盤社会では、知識・技能の獲得はもちろんのこと、正しい価値判断や主体的・創造的な行動ができる資質や能力をもつことが望まれる。そのためには、対象の本質や価値、真理などの獲得という学びの結果得られるもの以上に、学びの過程が重視されなければならない。対象に向かって、問い続け、学んでいる過程で培われる創造的な思考力、的確な判断力、豊かな表現力などの主体的な能力こそ、将来、自分の身の回りにあるさまざまな問題を切り開いていくために必要だからである。

そこで、めざす子ども像としては、「問い続け、質の高い学びができる子ども」を考えている。対象に向かって問い続ける中に、対象への疑問や他者との認識の食い違いが生まれ、主体的な能力を培う場が生まれる。何とか対象を理解しようと努め、何とか他者の考えとの共通点を見出したり相違点を探ったりすることで主体的な能力を育てようとしているのである。より質の高い学びを実現しようとするのが一人一人の主体的な能力を磨く場となるのである。

また、主体的な能力は生きてはたらく力になり、問題を明らかにしようとする力にもなる。それと同時に、これからの学びの質を高めていくための力にもなる。この主体的な能力を育成することによって「質の高い学びができる子ども」を育てようとしているのである。

2. 「学び」について

「学び」は、対象・他者・自己と対話することで成熟していく三位一体の活動であると考えている。それぞれの対話は、独立したものではなく、ほかの対話も意識しながら進めるものである。とりわけ学校の中で行われる「学び」は、3つの対話の中でも特に他者との対話が重要になる。

対象・他者・自己との対話の三位一体性

子どもは、自らの意思で目の前にある対象とかわり、対象のもつ意味を明らかにしていこうとする。他者もまた、対象への興味を持ち対象の持つ意味を探ろうとしている。そこで他者の対象に対する思いや願い・考えに触れ、ものの見方や考え方の多様性を知るのである。そこから、似ている点や違う点を明確にしていく。自分にはない他者の思いや願い・考えとその根拠とのつながりを吟味し、納得したり、批判的に思考したりして、互いが納得できる部分を増やしていくのである。

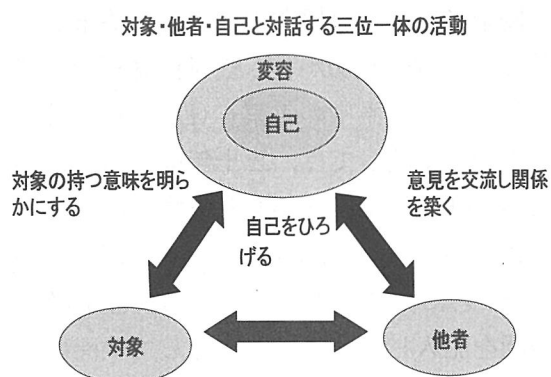
吟味しているときは、他者の思いや願い・考えと自分の思いや願い・考え、それが対象の認識の仕方として妥当なのかどうか、対象・他者・自己との対話を同時に行っている状態といえる。

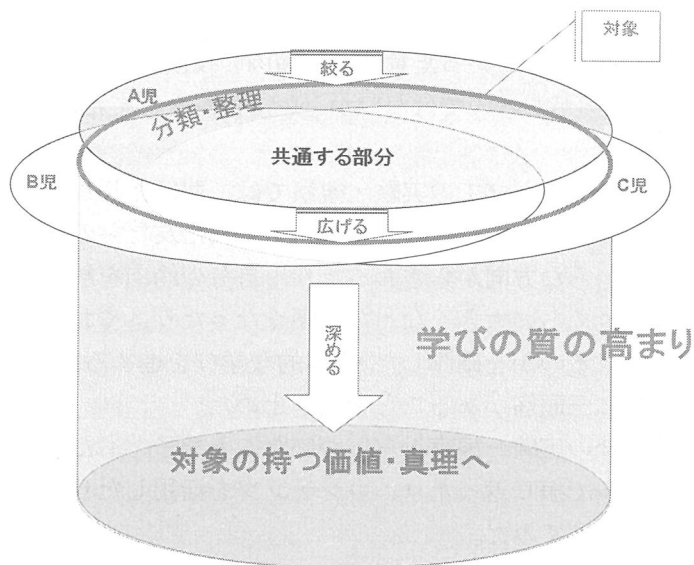
これらのことから、「学び」は、対象・他者・自己との対話のうち一つも欠けることなく、三位一体の対話によってのみ成熟していくと考えているのである。

3. 「学びの質の高まり」とは

(1) 対象への認識を更新すること

学びは、他者と擦り合わせることで少なくとも自分の考えられる範囲よりは多くの視点からのもの





のの見方や考え方を得ることができる。しかしそれはまだ、質的に高まるための過程であって、その多様なものの見方や考え方が絞られ、広げられ、分類・整理されていくことで、余計なものがそぎ落とされ、そして新たに必要なものが追加され、質が高まるのである。

対象への思いや願い・考えに「絞る」・「広げる」・「整理する」視点具备了った時、子どもは対象への認識を深め、更新していくことができるのである。そのときには、学びは質的な高まりを見せたといえる。

(2) 他者への認識を更新すること

他者との対話によって、他者の学びの姿勢に共感し自分に生かせたり、他者の思いや願い・考えに共感し共有できたりしたときには、対象の意味を捉え直すことができる。

また、協同的な学びから、他者の思いや願い・考えにじかに触れ、「～の考えを持っていた～さんが～と考えるようになった。」といった、ともに学ぶ仲間の学びの変容までも認識していく。そうして、仲間のよさに目を向けると同時に、他者の存在の大切さに気づくようになる。その際、謙虚に聞こうとする姿勢、ともに学ぼうとする姿勢が育つと考える。

このように、他者への認識を更新することによって、集団としての学びの質が高まると考える。

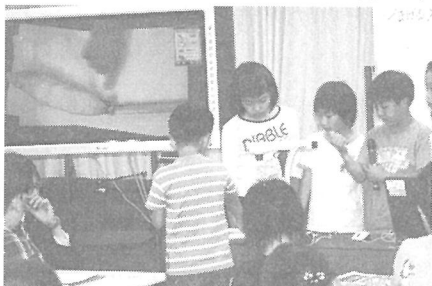
(3) 自己への認識を更新すること

また、学んだことの自己認識、他者への自己認識、学んでいる自己への認識という3つの新しい自己を認識していくことができる。

自分は対象をどのように認識できるようになったのか、自分は他者をどのように思うようになったのか、自分がどのように変容したのかという自己への認識を更新していくことは、変容した自己に気づくという意味で、学びの質の高まりには欠かせない。

4. 「学びの質の高まり」実践例

では、実際に4年生の理科の学習を通して、学びの質の高まりがどのような場面で起こっている



のかを、「腕が動く秘密を探る学習」の中の、自由に動く腕の骨にどのように筋肉がついているのかを探っている場面を用い説明する。

前もって作っていたモデルを使い、グループごとの考え方を出し合った。

まず子どもたちが注目したのが上腕二頭筋である。この筋肉が縮んだり伸びたりして腕の曲げ伸ばしができるのではないかという意見が出された。

しかし、それには納得できない子どもたちもたくさんいた。「その筋肉は縮んだり伸びたりするけれど、腕が伸びる力を発生させることはできない。」「筋肉を伸ばしても腕を押す力にはならない。」というのである。ほかにも、「腕を伸ばすときは、筋肉が硬くなっていない。」という実際に自分の腕を触って考え

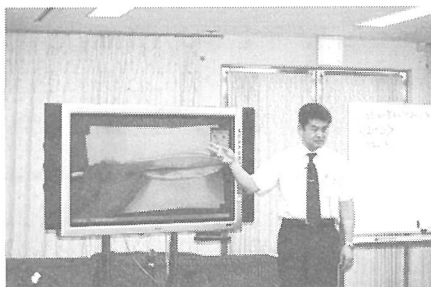


た発言も出された。

また、「押すより引っ張ることで大きな力が出せる。」といった意味の、筋肉の役割に迫る発言も見られた。そこから子どもたちは、もう1つの筋肉があるのではないかという仮説を立てたのである。



そのあとのグループでの実験・観察では、曲げたり止めたり伸ばしたりと注文をつけながら、力を入れた友だちの腕の筋肉をいろいろな方向からさわったり、自分の筋肉を触ったりして、どれくらい大きくなったり硬くなったり、やわらかくなったりするのかを確認した。協同的な学びを進める中で、二頭筋以外に三頭筋があることを突き止めた。



そこで、今の実験・観察から気づいたことを子どもたちが作ったモデルで振り返ったり、コンテンツを活用したりしながら、考え直してみた。

その結果、それらの筋肉は互いに相反する動きをしていることを突き止めたのである。

この授業を通して、腕を曲げる役割をする上腕二頭筋だけでは腕を伸ばす力にはならないことから、出された考えに疑問を持ち、別の筋肉があることを予想し、筋肉の動きや役割をつかむことができた。他者とのかわりから対象を見つめなおすことにより、対象への認識を更新した一例といえる。

対象へのものの見方や考え方に新たな視点を加えることにより、子どもは対象を広げ、絞り、整理し、子どもの学びは深まっていく。それまでは対象を知ろうとする段階の子どもたちが、他者の思いや願い・考えに触れ、発展させようとする段階にまで学びの質が高まっていったと考えられる。

それぞれの学びの質は、ただ自然に発展していくものではない。そこには子どもの意欲・態度・能力といった個人の力量や学習集団としての質はもちろん、子どもに足りない視点は何か、だれの思いや願い・考えがその子どもに必要なかといった教師のみとりと支援がどうしても必要になる。

5. 「学び質の高まり」に向けて

(1) 「学習文化」を創っていくこと

「学習文化」とは、学び手と教師が、よりよい学びを目指して作り上げてきた成果や様式、内容を指す。「学習文化」を大きく分けると次の4つになる。

1. 学び手と相互に学び合う仲間との温かい人間関係
2. 授業をしているうちに自然に身に付く規律や生まれる雰囲気とは別の、意図的に創り上げなければならない学びを進めるための規律
3. 規律を守ろうとする学び手の前向きさや学びに向かおうとする意欲や態度
4. 学びによって手に入れた知識や技能

「学習文化」を創っていくことは、学ぶことのできる集団を創り上げることと言ってもいいかもしれない。

(2) みとりと支援を積極的に行うこと

わたしたちの考えるみとりは、ただ単に、知の部分だけの捉えで子どもを理解するというのではなく、人間的な部分も含めて、その子どもとその子どもから湧き出した思いや願い・考えを合わせて理解しようという考え方に立っている。それは、見えている部分だけをみとるのではなく、見えない部分にもかかわっていこうとする能動的な行為である。

また、学びにおけるゆれや変容をみとり、記録することを大切にしている。そして、次の時間にはどのような思いや願い・考えを持って学ぶのかをみとることによって、子ども自身や子どもどう

しのかかわりも理解することができると考えている。このようなみとりがあってはじめて効果的な支援が生まれるのである。

個人への支援は、つまりきにどのように対処するか、その子に見合ったものやことをどのように提供するかなど、対象と子どもとの距離を近づけるための手立てである。

また、集団への支援は、どの子どもとどの子どもの思いや願い・考えを擦り合わせるか、それによってどのような新しい共通な認識が生まれるのかを意識するなど、他者とのかかわりや集団としての高まりを生むための手立てである。

それぞれが意欲を持ち達成感を持てるようにするための個に対応した支援や、思いや願い・考えに対し、つなぎ、もどす支援があるからこそ、学びに連続性が生まれるのである。そうした支援の繰り返しによりひろがりや深まりが生まれ、学びの質の高まりへと向かっていくものと考えている。

(3) プロジェクト型カリキュラムを意識すること

カリキュラム作りでは、どのような子どもに育てたいのかという視点を持ち、子どもにとって望ましい学びが展開されるよう、教材を吟味し選択しながら、子どもの発達段階や目的に応じて配列する。それが子どもの学びの実態に合わないとは判断した場合には、教材を選択し直したり、配列し直したりして、子どもの学びに寄り添い、子どもの実態に合うものに作り変えていくような柔軟な対応をしなければならない。

課題が、その都度子どもの実態や場面ごとの状況を察知した具体的で自然なものであるかどうかを検証しながら、学びの活動に修正を加えていくのである。言い換えれば、プログラムの計画カリキュラムを、プロジェクト的な実践カリキュラムに構成し直していくことであるといえる。

(4) グループによる協同的な学びを進めること

わたしたちが考えている学びの形態は、一人学習・ペア学習・グループ学習・一斉学習である。そのときの状況に応じて適切と思われる形態を適用しながら学びを進めている。

その中で、その場や状況に応じ、同じ考えの子どもどうしで考えを深めたり、違う考えを持った少人数で討議したりする学びの形態を特に大切にしている。

時には理解しにくい子どもにグループの仲間が教える場面を作っていく。そうした学びの中で、どの子どもも仲間に大切にされている意識が生まれ、一人一人が生かされる場面が生まれ、自立性や自発性が育つと考える。

また、時には、難しい課題に挑戦し、グループで知恵を出し合い課題を乗り越えていく場面を作っていく。そうした学びの中では、グループの力で課題を乗り越えようとする協力や連帯意識が生まれる。互いの考えを与え合い、補い合う関係が生まれ、協同性が育つと考える。

このような理由で、少人数でのグループによる協同的な学びを大切にしているのである。

一人一人が生きるかかわりをめざすために、意図的にグループを組織するなど、その場や状況に適した学びの形態を模索していく柔軟性も必要になってくるであろう。それはプロジェクト的な学びでもあり、すべての子どもの学びを保障することにもつながると考える。

参考文献

教師たちの挑戦—授業を創る 学びが変わる	佐藤 学	小学館	2003年
「学ぶ」ということの意味	佐伯 胖	岩波書店	1995年
教室の人間学	吉本 均	明治図書	1994年

紀要第29集『「意味と内容」がひろがる学びの創造』～まなざしの共有によって～

和歌山大学教育学部附属小学校 2005年

紀要第30集『「意味と内容」がひろがる学びの創造』～互いのまなざしが共鳴することによって～

和歌山大学教育学部附属小学校 2006年

紀要第31集『「互いのまなざしが響き合う学習」～一人一人への確かなみとりと支援によって～

和歌山大学教育学部附属小学校 2007年